

語り手 大原寿美子さん
(明治40年生まれ)

昭和60年8月15日収録

あらすじ

昔、お父さんとお母さんに子供がなく、願かけをした。三七、二十一日の祈願をしたら、中指の腹が大きゆうなり、そこを割ったら子供が出てきた。まま食え、とど食えで1年、2年、3年、5年とたつて「二十にもなつても同じ五分じゃが、なに一つ頼もつもない」て言った。

五分次郎

(八頭郡智頭町波多)



イラスト・福本隆男

島根に類話「カタツムリの息子」

「鯛売りはどこにおるじやろう」
「ここにおります」。
見ると五分ぐらいな人間が鯛を縦に負つて、鯛ばつかり歩きよるよつな。な声が出るから、そつ言つたら、女中さんがかごを持って買いに出てみるんは、わしや持つとるけおいた。と、何にもおりやあせん。え泊めてくれ」と言つた。夜が明けると、五分次郎は大変に悲しげにすすり泣く。「どげしたじやえ」と言われると、「わたしやあ、ほかのものあは大喜びで、次郎と嫁さよう食べんに、わたしの食べるもんをお嬢さんが食べてしもうて、今朝はさい」と旅に出させた。途中、五分次郎は海に落ちて鯛に食われたり、鬼の出る宿に泊まったり、奥に入つてしたが、鬼が忘れた打ち見るとお嬢さんの口のほとりに粉がついている。「粉でもひいて返す」と、

で泊めたところが、なかなか利口なもんじや。自分か小うまい粉を食べて、少し残しておいた。その家に一人のお嬢さんがあつた。夜、静まつてから、お嬢さんの口周りにその粉を塗りつけておいた。

夜が明けると、五分次郎は馬に食われたりしながらも無事に戻つてきやえ」と言われると、「わたしやあ、ほかのものあは大喜びで、次郎と嫁さよう食べんに、わたしの食べるもんをお嬢さんが食べてしもうて、今朝はさい」と旅に出させた。途中、五分次郎は海に落ちた鯛に食われたり、鬼の出る宿に泊まったり、奥に入つてしたが、鬼が忘れた打ち見るとお嬢さんの口のほとりに粉がついている。「粉でもひいて返す」と、

解説

どつしたらいいか」「わたしやあ、粉もお金も何にもいらんけど、お嬢さんをお嫁さんにほしい」と言つた。「そんなことは」とお母さんは困つていたが、お嬢さんが「一寸法師・鬼征伐型」「親かたがない。わたしやあ指太郎」あたりに該当する話であろう。島根県鹿足郡吉賀町では「カタツムリの息子」として語られていくと言つた。それからお嫁になつて行つていたところ、五分次郎は馬に食われたりしながらも無事に戻つてきやえ」と言われると、「わたしやあ、ほかのものあは大喜びで、次郎と嫁さよう食べんに、わたしの食べるもんをお嬢さんが食べてしもうて、今朝はさい」と旅に出させた。途中、五分次郎は海に落ちた鯛に食われたり、鬼の出る宿に泊まったり、奥に入つてしたが、鬼が忘れた打ち見るとお嬢さんの口のほとりに粉がついている。「粉でもひいて返す」と、

なかなかスケールの大きい話である。関敬吾「本昔話大成」によれば、本格昔話の「誕生」の中には「田螺息子」とか「一寸法師・鬼征伐型」「親かたがない。わたしやあ指太郎」あたりに該当する話であろう。島根県鹿足郡吉賀町では「カタツムリの息子」として語られていくと言つた。それからお嫁になつて行つていたところ、五分次郎は馬に食われたりしながらも無事に戻つてきやえ」と言われると、「わたしやあ、ほかのものあは大喜びで、次郎と嫁さよう食べんに、わたしの食べるもんをお嬢さんが食べてしもうて、今朝はさい」と旅に出させた。途中、五分次郎は海に落ちた鯛に食われたり、鬼の出る宿に泊まったり、奥に入つてしたが、鬼が忘れた打ち見るとお嬢さんの口のほとりに粉がついている。「粉でもひいて返す」と、

(元鳥取短期大学教授)

(水曜日に掲載)